

「研究機関が遠い地域」への大学が果たす研修・研究支援のあり方に関する一考察

——「おでかけ！和歌山信愛大学」の取り組みからの検証——

A Consideration on the Role of Universities in Providing Training and Research Support to "Areas Far from Research Institutes": Verification from the "Visiting Lecture Given by Wakayama Shinai University"

原 康行 大橋 功

大学等の研究機関が県北部に集中する和歌山県において、研究機関が遠い県南エリアの研修・研究支援を目的に、複数の大学教員が出張し講演を行う「おでかけ！和歌山信愛大学」を実施した。大学が研修内容を企画し講演を担当した。地域の研修ニーズを把握した共催自治体に参加者募集、運営を担ったことで、参加者の満足度の高い研修となり、そのことが参加者の講演後の大学教員への相談行動(自園の研修等について)につながった。地域の保育士や各機関、自治体とのつながりを生み出し、継続的な取り組み支援の足掛かりとなる事業となった。

キーワード：研究・研修支援、地域支援、地域連携、出張サポート

1 問題と目的

1.1 大学における地域連携・地域貢献

大学における社会的貢献は、2006年に改正された「教育基本法」第七条において、「大学は、(中略)深く真理を探究して新たな知見を創造し、これらの成果を広く社会に提供することにより、社会の発展に寄与する」ことが示され、「研究・教育」の役割に加え、より直接的に「社会や地域に貢献すること」が法的に位置付けられた。教育基本法改正に基づき策定された第2期教育振興基本計画では「大学の資源を活用した、地域の課題解決への取り組みが教育研究機能の向上、地域の活性化にもつながる」との考えが示された。大藪(2022)によると、その後、文部科学省が2013年度より実施した「地(知)の拠点整備事業(大学COC事業：課題解決への様々な人材や情報・技術が集まる、地域コミュニティの中核的存在としての大学の機能強化)」、そ

して「地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(大学COC+事業)」につながったとしている。

大学の地域との連携状況については、2006年の教育基本法改正前の2005年7月に実施した内閣官房都市再生本部(2007)の調査がある。改正前の時点でも、大学との連携事業を「現在行っている」と回答した自治体は43.3%(371件)、大学と連携に関する協定を締結した自治体は回答自治体の63.3%(542件)と示され、深沼(2010)は、「大学を地域の重要な資源と位置づけ、地域の活性化に向けて積極的に活用していこうという連携の取り組みは、近年さまざまな大学と地域で行われるようになった」と示している。

野澤(2016)は、大学の地域連携の取り組み分野について調査を行っている。取り組み分野として「公開講座の開催」92.5%が最も多く、次いで「学校外で開催される講演会、社会教育事業への講師派遣」83.9%、「社会・地域問題への対処や地域活性化活動への教職員・学生の参画」74.9%となり、教育機能面での活動が比較的高い割合であると示

している。また、その中で「一番注力しているもの」として、「社会・地域問題への対処や地域活性化活動への教職員・学生の参画」16.5%が最も多く、「連携協定に基づく自治体との連携事業への教職員・学生の参画」9.6%、「公開講座の開催」9.5%と続き、地域課題に対処する取り組みに特に注力していることを明らかにしている。

1.2 和歌山信愛大学における地域連携・地域貢献の取り組み

和歌山信愛大学（以後、「本学」と示す）においても、2019年の開学にあわせ地域連携・地域貢献の取り組みを開始した。その一つの取り組み機関として、「わかやま子ども学総合研究センター（以後、「研究センター」と示す）」が開設された。研究センターの目的は、「本学の建学の精神に基づき、子どもの心身の成長・発達・生活・文化・教育・福祉・子育て支援等を総合的に研究する子ども学に関して多角的に調査研究及び実践を行い、地域社会への知的還元と支援を多様に展開し公共の利益に貢献することを目的とした取り組みを推進すること（わかやま子ども学総合研究センター規程 第二条（2019）より抜粋）」である。

1.3 和歌山県の地理的特性、地域特性との関わり

本研究センターの取り組みを進める上で、和歌山県の地理的特性、地域特性を考慮に入れる必要がある。

和歌山県において大学等の研究機関は、人口の多い県庁所在地である和歌山市、県北に集中する傾向にあり、県南では田辺市に和歌山大学の「南紀熊野サテライト」が一つある程度である。和歌山県は南北に長く、山間部が多いため、県北にある研究機関を訪問するために2〜3時間を要する地域も多い。本研究センターには、本学教員から指導支援を受け研究を進める「特別研究会員」という制度があるが、2024年度の全会員29名のうち、所属勤務地が県北の方が24名（和歌山市21名、海南市1名、紀の川市1名、岩出市1名）、県南の方が1名（東牟婁郡串本町）、県外4名であった。県南の人口が少ないことも一つの要因ではあるものの、県南の研修・研究への支援が十分とは言い難い一つのデータである。

1.4 問題と留意点、目的

和歌山県の県南のように人口が少なく、子どもや子ども

に関わる人口も少ない地域には、その地域に特化した解決すべき課題がある。同県内にある地元の大学として、このような地域と連携を深め、地域の課題解決に向けた地域貢献を進めることは大きな使命である。

地元の大学として「研究機関が遠い地域」への研修・研究支援を進める上での留意点を以下にまとめた。

一つ目は、開催形式についてである。コロナ禍でリモートでの研修方法が一般的になり、手軽に様々な研修に触れられ大変便利になった。一方で、我々はリモートではなく対面での研修の有意義さについても再認識してきた。同県内にある地元の大学だからこそ、リモートではなく、地域に出向き対面で事業を実施することで、地域の研修・研究に関するニーズを掘り起こし、意識を喚起できるのではないだろうか。

二つ目は、地域（自治体等）の状況把握と負担についてある。事業を進める際、地域（自治体等）における研修・研究に関する意識やニーズの有無、人的リソースの状況を把握しておくことが重要である。加えて、金銭面や業務面で過度な負担にならないことにも留意が必要であろう。

三つ目は、地域と大学との関わり方、連携方法である。地域環境やニーズに合わせた取り組みを進めるためにも、大学がすべてを主導し実施するのではなく、地域の主体的な関わりを生み出すことが必須である。また一度きりの単発的な取り組みにするのではなく、大学や大学教員とつながり、研究機関を活用する一つのきっかけ作りであることを意識し計画することが重要である。

そこで、本研究では、「研究機関が遠い」和歌山県の県南エリアを対象に、研修・研究支援を目的に「おでかけ！和歌山信愛大学（運営主体：本学 研究センター）」の取り組みを実施し、参加者、共催市町・団体への質問紙調査結果を分析することで、地元の大学の地域連携・地域貢献のあり方について考察し、一つの方法を提案する。

2 方 法

2.1 支援事業「おでかけ！和歌山信愛大学」

2.1.1 事業名

事業名は、参加者の地元での開催により、利便性が高く参加しやすいこと、教育専門機関による高度な内容に触れられることが伝わるよう「あなたの住む町で学ぶ。おでか

け！和歌山信愛大学」とした。サブタイトルは、「子どもの『創造性』を育む保育・教育とは？」とし、保育・幼児教育、学校教育分野において関心の高い内容を大学側で選定し、共催市町・団体に提案し、協議の上で決定した。

2.1.2 研究センター業務との関連

事業は、本事業の主体である研究センター業務の「②子ども学に関する学習機会の提供」「③子どもに関わる支援者の養成及び研修」「④子ども学に関する資料の収集及び提供」「⑤その他センターの目的達成に必要な業務」の4点をもとに企画した。

2.1.3 目的

研究センター業務に基づき、事業目的を以下とした。
「①研究機関が遠い地域の保育・教育力、研究力向上のきっかけの場とする」「②幼児教育における最新の知見を共有できる場とする」「③紀南地方の保育・教育行政機関と研究機関とのつながりを作る」「④本学学生の就職先、大学における研究フィールド確保の機会とする」「⑤本学卒業生への支援、アフターフォローの機会とする」である。

2.1.4 開催地・場所、共催機関、後援機関

開催地は、県南の中核都市である田辺市（人口約7万人：県内人口2位の都市）とし、開催場所は田辺市役所2階大会議室（和歌山県田辺市東山1丁目5番1号）とした。

主催は、「和歌山信愛大学 わかやま子ども学総合研究センター」であり、共催は「田辺市 保健福祉部 子育て推進課」「田辺市教育委員会 学校教育課」「みなべ町 子育て推進課」「社会福祉法人ふたば福祉会 児童発達支援センター 通園ありんこ」であった。「社会福祉法人 ふたば福祉会」は、田辺・西牟婁地方及びみなべ町において発達障害の子どもたちへの支援を進めていることから共催に加わった。みなべ町は行政圏域では隣の圏域にあたるが、生活圏として田辺市に関わりが深いことから、共催に加わった。

後援は「和歌山県」「和歌山県教育委員会」であった。

2.1.5 開催日時

開催日時は、幼児教育施設の運動会シーズンを避け、2024年9月21日（土）とした。また、平日を避け、土曜保育が終了する14:00から17:00とした。

2.1.6 対象者

対象者は、和歌山県 田辺市、西牟婁地域、みなべ町において、保育・幼児教育、学校教育、特別支援教育等に関わる者とした。指導、支援について気兼ねなく意見交換ができるよう、基本的に保護者の参加は募らなかった。

2.1.7 運営における役割分担、経費、準備

大学が「講演内容の企画提案」「広報チラシ作成」「講演」「講演会進行」を行い、共催市町・団体（以下、「共催市町」と示す）が「広報、参加者募集」「会場準備」「資料準備」「当日会場運営（参加者案内、誘導）」等を担った。

経費は、大学が広報チラシの作成費、講師の出張旅費等を負担し、講師料は無料とした。共催市町は会場費、資料印刷等を負担した。参加費は無料とした。

事前準備、打ち合わせは、基本的に電話、メールで行い、実施1ヶ月前に、主催者、共催市町の担当者が開催会場に集まり、顔合わせ、会場確認、当日の運営確認等を行った。

2.1.8 開催日当日スケジュール、役割分担（表1）

当日12:00に大学代表者、共催市町担当者（当日のみの運営補助職員を含む）が集まり、運営の最終確認と準備を行なった。13:30に受付を開始し、14:00から研究センター長が開会の挨拶、事業趣旨の説明を行い、アドミッションセンター長が大学紹介を行った。14:10から15:10に研究センター長 大橋 功教授が、講演①「幼児造形表現を通した創造性教育」と題し、「創造性」教育についての基本的な捉え方、幼児教育現場での実践を紹介した。15:20から16:10は、副研究センター長 原 康行准教授が、講演②「特別支援の視点から見た創造性教育」と題し講演を行なった。16:20からは各施設や学校の個別の研修・研究の相談にあたる時間とし、上記の教授、准教授が対応した。

表1 当日のスケジュール

時 間	内 容
13:30	受付開始
14:00～14:10	開会の挨拶 大橋 功 教授 大学紹介 原 義則 アドミッションセンター長
14:10～15:10	「幼児造形表現を通した創造性教育」 研究センター長 大橋 功 教授
15:20～16:10	「特別支援の視点から見た創造性教育」 副研究センター 原 康行 准教授
16:10～16:15	閉会の挨拶
16:20～17:00	研修・研究相談（個別ブースにて） 担当：大橋 功 教授、原 康行 准教授

3 検証の手続き

3.1 調査方法の概略

「おでかけ！和歌山信愛大学」の取り組みの成果と課題を調査するため、事業終了後、参加者と共催市町の運営担当者に質問紙調査を実施した。調査は、Google フォームを用いた。当日、研究依頼文書と共に Google フォームの QR コードを配布し、研究趣旨の説明後、入力 of 協力依頼をした。いずれも 1 週間以内の入力とした。

3.2 倫理的配慮

本研究は、和歌山信愛大学研究倫理委員会の承認を得て実施した（審査番号：信大倫審 241501）。

研究依頼文書には、①研究協力は任意であること、②協力を拒否することや途中で止めても不利益が生じないこと、③協力により予測されるリスク、④調査結果は研究の目的以外に利用しないこと等を明記した。参加者、共催市町の運営担当者には、当日、文章と口頭で説明を行った。

参加者、共催市町の運営担当者の研究協力への同意は、質問紙の提出（送信）をもって同意を得たものとした。

3.3 参加者への質問紙（表 2）

参加者への質問項目は、回答者の基本情報として、①職名、②年齢、③勤続年数を設定した。参加目的について、④何を期待し参加したか、講演内容について、⑤研修全体を通しての満足度、⑥講演 1「幼児造形表現を通した創造性教育」の満足度、⑦その理由、⑧講演 2「特別支援の視点からの創造性教育」の満足度、⑨その理由、⑩研修での学びが明日からの業務に役立つと思うか、加えて、⑪次回への参加について、⑫今後、受講してみたい内容、⑬本事業に関する自由な感想、⑭運営面への意見を設定した。

3.4 共催者への質問紙（表 3）

共催者への質問項目は、回答者の基本情報として、①職名を設定した。事業への共催意図、目的について、②期待した内容を設定した。講演内容については、③講演 1「幼児造形表現を通した創造性教育」の満足度、④その理由、⑤講演 2「特別支援の視点からの創造性教育」の満足度、⑥その理由、⑦講演全体の満足度、⑧その理由、⑨参加者の研修での学びが明日からの業務に役立つと思うか、⑩そ

の理由とした。また、⑪次回、事業共催の意向、⑫今後、共催してみたい内容、⑬運営面への意見を設定した。

表 2 参加者への質問項目

項目	質問内容
①	回答者 職名（以下の中から選択する） 【保育士、幼稚園教諭、保育教諭、施設職員、園長・所長（管理職）、教員（小学校等）、保育・教育 行政関係、その他】
②	年齢（以下の中から選択する） 【20 代、30 代、40 代、50 代、60 代以上】
③	勤続年数（以下の中から選択する） 【3 年未満、3~10 年、11~20 年、21~30 年、31~40 年、41 年以上、その他】
④	何を期待し、参加したか？（自由記述・複数回答可）
⑤	全体を通してどのぐらい満足したか（5 段階評価）
⑥	講演①「幼児造形表現を通した創造性教育」の内容等にどのぐらい満足したか（5 段階評価）
⑦	問⑥の理由をご記入ください（自由記述）
⑧	講演②「特別支援の視点からの創造性教育」に内容等にどのぐらい満足したか（5 段階評価）
⑨	問⑧の理由をご記入ください（自由記述）
⑩	この研修での学びは、明日からの業務に役立つと思うか（5 段階評価）
⑪	和歌山信愛大学が「おでかけ」して来たら、また参加してみたいか（以下の中から選択する） 【参加したい、参加しない、わからない】
⑫	今後、受講してみたい内容をご記入ください（自由記述）
⑬	今回の「おでかけ！信愛大学」について、感想を自由にご記入ください（自由記述）
⑭	運営面での要望やアドバイスをご記入ください（自由記述）

表 3 共催者への質問項目

項目	質問内容
①	回答者 職名
②	共催者として、期待した内容、目的は何か（自由記述）
③	共催者として、講演 1「幼児造形表現を通した創造性教育」の内容等にどのぐらい満足したか（5 段階評価）
④	問③の理由をご記入ください（自由記述）
⑤	共催者として、講演②「特別支援の視点からの創造性教育」に内容等にどのぐらい満足したか（5 段階評価）
⑥	問⑤の理由をご記入ください（自由記述）
⑦	共催者として、講演全体を通して、どのぐらい満足したか（5 段階評価）
⑧	問⑦の理由をご記入ください（自由記述）
⑨	この研修での学びは、参加者の明日からの業務に役立つと思うか（5 段階評価）
⑩	問⑨の理由をご記入ください（自由記述）
⑪	今後、今回のような事業企画があった場合、共催したいか（5 段階評価）
⑫	今後、共催してみたい内容をご記入ください（自由記述）
⑬	運営面でのご意見をご記入ください（自由記述）

4 結 果

4.1 参加者への質問紙調査の結果

4.1.1 参加者（質問紙 項目①②③）（表4）

本事業参加者は82名（運営者を除く）、内、質問紙調査に答えた参加者は48名となり、回収率は58.5%だった。

質問紙に回答した参加者（以後、「参加者」と示す）は、保育士が35.4%（17名）と一番多く、次いで園長・所長（管理職）20.8%（10名）であった。保育所、幼稚園、こども園関係者の合計は72.9%（35名）となった。児童発達支援センター職員、放課後等デイサービス職員、言語聴覚士など福祉・施設職員は18.8%（9名）、小学校教員2.1%（1名）、行政関係者（保育・教育）6.3%（3名）だった。参加者の年齢層は、50代が29.2%（14名）、40代が27.1%（13名）、20代が18.8%（9名）、30代、60代以上が同数で各12.5%（6名）であった。

勤続年数別では、11～20年勤続者が27.1%（13名）、3～10年勤続者が22.9%（11名）、31～40年勤続者が18.8%（9名）、3年未満、21～30年勤続者が同数で各14.6%（7名）、41年以上勤続者が2.1%（1名）であった。

4.1.2 参加者の参加目的（質問紙 項目④）（表5）

参加目的として、一番多かったのは、本事業のテーマで

もある「創造性・主体性に理解を深めたい」20.0%（11名）、次いで、同数で「造形表現に理解を深めたい」「特別支援に理解を深めたい」「保育の質の向上のため」が各16.4%（9名）であった。「新しい学びを得たい」14.5%（8名）、「担当講師の話を聞きたい」7.3%（4名）、同数で「子ども理解を進めたい」「事業そのものに興味があつた」が各3.6%（2名）、「研修の材料を集めるため」1.8%（1名）であった。

4.1.3 参加者満足度

4.1.3.1 全体を通した参加者満足度（質問紙 項目⑤）（表6）

全体を通した参加者満足度では、「非常に満足」50.0%（24名）、「ある程度満足」33.3%（16名）、「どちらでもない」8.3%（4名）、「あまり満足しなかった」6.3%（3名）「全く満足しなかった」2.1%（1名）」であった。

表6 事業全体を通した参加者満足度

	参加者数	1 非常に満足	2 ある程度満足	3 どちらでもない	4 あまり満足しなかった	5 全く満足しなかった
保育士	17	10	4	1		
保育教諭	5	5				
幼稚園教諭	3		2	1		
園長・所長（管理職）	10	2	6	1	1	
幼児施設関係者 小計	35	17	12	3	3	0
福祉・施設職員	9	5	3			1
教員（小学校）	1	1				
保育・教育 行政関係	3	1	1	1		
参加者 合計	48	24	16	4	3	1
参加者 割合	100.0%	50.0%	33.3%	8.3%	6.3%	2.1%

表4 質問紙調査に回答した参加者の内訳

			内訳 年齢別						内訳 勤続年数別							
	参加者 数	割合	20代	30代	40代	50代	60代 以上	年齢別 合計	3年 未満	3年～ 10	11年～ 20年	21年～ 30年	31年～ 40年	41年 以上	勤続年数別 合計	
保育士	17	35.4%	5	2	6	3	1	17	4	4	5	2	1	1	17	
保育教諭	5	10.4%	2	1	2			5		2	3				5	
幼稚園教諭	3	6.3%		1	1	1		3			3				3	
園長・所長（管理職）	10	20.8%			1	5	4	10	1	2		3	4		10	
幼児施設関係者 小計	35	72.9%	7	4	10	9	5	35	5	8	11	5	5	1	35	
福祉・施設職員	9	18.8%	2	1	2	3	1	9	1	3	2	1	2		9	
教員（小学校）	1	2.1%				1		1					1		1	
保育・教育 行政関係	3	6.3%		1	1	1		3	1			1	1		3	
参加者 合計	48	100.0%	9	6	13	14	6	48	7	11	13	7	9	1	48	
参加者 割合			18.8%	12.5%	27.1%	29.2%	12.5%	100.0%	14.6%	22.9%	27.1%	14.6%	18.8%	2.1%	100.0%	

表5 参加者の参加目的

	参加者数	創造性・主体性	造形表現	特別支援・方法	保育の質向上	新しい学び	講師に興味	子ども理解	事業に興味	研修材料	合計
保育士	17	3	2	1	4	3	2	1			16
保育教諭	5	1	2		2	1					6
幼稚園教諭	3		2	2							4
園長・所長（管理職）	10	2			3	3	1		2	1	12
幼児施設関係者 小計	35	6	6	3	9	7	3	1	2	1	38
福祉・施設職員	9	3	1	4				1			9
教員（小学校）	1						1				1
保育・教育 行政関係	3	2	2	2		1					7
参加者/意見数 合計	48	11	9	9	9	8	4	2	2	1	55
意見 割合		20.0%	16.4%	16.4%	16.4%	14.5%	7.3%	3.6%	3.6%	1.8%	100.0%

4.1.3.2 講義①「幼児造形表現を通した創造性教育」の参加者満足度、感想（理由）（質問紙 項目⑥⑦）（表 7）

講義①での参加者満足度では、「非常に満足」56.3%（27名）、「ある程度満足」31.3%（15名）、「どちらでもない」12.5%（6名）、「あまり満足しなかった」「全く満足しなかった」0.0%（0名）であった。参加者感想（理由）として、「新しい学び・造形表現の理解が進んだ」52.3%（34名）、「再認識できた」9.2%（6名）、「納得ができた」「保育に役立つと感じた」が各 3.1%（2名）、「わかりやすかった」10.8%（7名）、「時間が足りない」21.5%（14名）であった。

表7 講義①「幼児造形表現を通した創造性教育」の参加者満足度

	参加者数	1 非常に満足	2 ある程度満足	3 どちらでもない	4 あまり満足しなかった	5 全く満足しなかった
保育士	17	10	3	4		
保育教諭	5	5				
幼稚園教諭	3	1	1	1		
園長・所長（管理職）	10	3	6	1		
幼児施設関係者 小計	35	19	10	6	0	0
福祉・施設職員	9	6	3			
教員（小学校）	1	1				
保育・教育 行政関係	3	1	2			
参加者 合計	48	27	15	6	0	0
参加者 割合	100.0%	56.3%	31.3%	12.5%	0.0%	0.0%

4.1.3.3 講演②「特別支援の視点からの創造性教育」の参加者満足度、感想（理由）（質問紙 項目⑧⑨）（表 8）

講義②での参加者満足度では、「非常に満足」58.3%（28名）、「ある程度満足」22.9%（11名）、「どちらでもない」14.6%（7名）、「あまり満足しなかった」「全く満足しなかった」が各 2.1%（1名）であった。参加者感想（理由）として、「スモールステップでの支援の理解が進んだ」21.2%（14名）、「褒める大切さがわかった」7.6%（5名）、「納得ができた」9.1%（6名）、「わかりやすかった」36.4%（24名）、「時間が足りない」22.7%（15名）、「その他」3.0%（2名）であった。

表8 講演②「特別支援の視点からの創造性教育」の参加者満足度

	参加者数	1 非常に満足	2 ある程度満足	3 どちらでもない	4 あまり満足しなかった	5 全く満足しなかった
保育士	17	10	4	2		1
保育教諭	5	5				
幼稚園教諭	3		3			
園長・所長（管理職）	10	4	3	2	1	
幼児施設関係者 小計	35	19	10	4	1	1
福祉・施設職員	9	7		2		
教員（小学校）	1	1				
保育・教育 行政関係	3	1	1	1		
参加者 合計	48	28	11	7	1	1
参加者 割合	100.0%	58.3%	22.9%	14.6%	2.1%	2.1%

4.1.3.4 研修での学びが自己の業務に役立つか（質問紙 項目⑩）（表 9）

研修での学びが明日からの業務に役立つと思うかの問いに、「非常に役立つ」75.0%（36名）、「ある程度役立つ」「どちらでもない」が同数で各 10.4%（5名）、「あまり役に立たない」4.2%（2名）、「全く役に立たない」0.0%（0名）であった。

表9 「研修での学びが自己の業務に役立つか」参加者意識

	参加者数	1 非常に役立つ	2 ある程度役立つ	3 どちらでもない	4 あまり役に立たない	5 全く役に立たない
保育士	17	13	1	2	1	
保育教諭	5	5				
幼稚園教諭	3	3				
園長・所長（管理職）	10	6	2	1	1	
幼児施設関係者 小計	35	27	3	3	2	0
福祉・施設職員	9	7		2		
教員（小学校）	1	1				
保育・教育 行政関係	3	1	2			
参加者 合計	48	36	5	5	2	0
参加者 割合	100.0%	75.0%	10.4%	10.4%	4.2%	0.0%

4.1.3.5 今後、同事業があれば参加するか（質問紙 項目⑪）（表 10）

次回への参加について、「参加したい」93.8%（45名）、「参加しない」0.0%（0名）、「わからない」6.3%（3名）であった。

表10 「今後、同事業があれば参加するか」参加者意識

	参加者数	1 参加したい	2 参加しない	3 わからない
保育士	17	17		
保育教諭	5	5		
幼稚園教諭	3	2		1
園長・所長（管理職）	10	9		1
幼児施設関係者 小計	35	33	0	2
福祉・施設職員	9	8		1
教員（小学校）	1	1		
保育・教育 行政関係	3	3		
参加者 合計	48	45	0	3
参加者 割合	100.0%	93.8%	0.0%	6.3%

4.1.3.6 今後、受講してみたい内容（自由記述）（質問紙 項目⑫）（表 11）

今後、受講してみたい内容では、今回の「創造性」「造形表現」「特別支援」を更に詳しく学ぶ内容や、「④『音楽表現』における創造性」のように今回のテーマから派生した内容、「⑤障害児の造形、表現活動」「⑦発達障害児に特化した創造性の引き出し方」のように今回の講演内容を組み合わせたものも示された。また、保育内容や指導方法ではない「⑭保護者対応」や「⑮支援者のモチベーションや支援力を高める研修、会議方法」に関する内容もあった。

表11 今後受講してみたい内容

意見	内 容
①	今回、聞けなかった続編
②	具体的に取り組まれた事例など
③	子どもの絵を見ながら、おしゃべり会
④	「音楽表現」における創造性
⑤	障害児の造形、表現活動
⑥	特別支援児の製作内容について
⑦	発達障害児に特化した創造性の引き出し方
⑧	障害児の思春期の性について
⑨	行動心理学
⑩	物事に熱中する子どもの世界の受け止め方
⑪	発達支援について
⑫	保育に関する内容
⑬	乳幼児の保育の仕方について
⑭	保護者対応
⑮	支援者のモチベーションや支援力を高める研修、会議方法

表12 運営面での要望やアドバイス

意見	内 容
①	紀南には研究機関がないため、大学が出向き学べる機会を作っていたただけるのはありがたい。
②	全体の底上げのため、県内の大学と園でつながり、もっと研修、研究を進めていくことを希望する。
③	講義内容、進め方も、とても理解しやすく良かった。各講義が1時間ではもったいない。定期的な勉強会等あれば嬉しい。
④	さまざまな取り組みがあれば参加したい。
⑤	優しくわかりやすい研修をまた期待する。良かった。
⑥	保育士の処遇改善Ⅱの受講実績につながるような設定であると先生達に受講を勧めやすい。
⑦	時間設定を予め明確にしておいていただけると助かる。(3時間なので1.5時間×2コマかと早合点した)
⑧	もう少し早く案内して欲しい。
⑨	机があるとメモが取りやすい。
⑩	足が不自由な者には1階駐車場の方が楽だったと思うので事前告知があるとありがたかった。
⑪	運営担当の皆さん、先生方、ありがとうございました。
⑫	会場設営から案内など、ありがとうございました。

4.1.3.7 「おでかけ！和歌山信愛大学」についての感想内容（自由記述）」（質問紙 項目③）

本事業への感想としては、「この出会いが、気付きを産み、地域の活性化に繋がっていくと感じた」「素晴らしい研修でした。もっとおでかけを広めてください」などの「おでかけ！和歌山信愛大学事業への期待」18.8%（9名）、「次回に期待」10.4%（5名）、「時間が足りない」8.3%（4名）、「面白かった、勉強になった」4.2%（2名）「その他」2.1%（1名）であった。

4.1.3.8 運営面での要望やアドバイス（自由記述）（質問紙 項目④）（表12）

運営面への意見としては、「①紀南に研究機関がないため、大学が出向き学べる機会を作っていたただけるのはありがたい。」「②全体の底上げのため、県内の大学と園でつながり、もっと研修、研究を進めていくことを希望する。」「③各講義が1時間ではもったいない。定期的な勉強会等あれば嬉しい。」など、「おでかけ！和歌山信愛大学事業への期待」や大学との連携に関する要望も改めて示されていた。

4.2 共催者への質問紙調査の結果（表13）

4.2.1 回答者（質問紙 項目①）

回答者は、共催各市町の指導主事、保育士であった。

4.2.2 共催者として期待した内容（質問紙 項目②）

共催者は、「職員のスキルアップ」「日々の保育に活かせる知識の獲得」「日々の保育の振り返りと学びが深められること」「最新の保育教育の情報に触れ、日頃の保育教育に活かす」等、参加者のスキルアップを期待していた。

4.2.3 共催者満足度

4.2.3.1 講義①「幼児造形表現を通した創造性教育」の共催者満足度、感想（理由）（質問紙 項目③④）

講義①での共催者満足度では、「非常に満足」100.0%（4名）であった。理由として、「子どもの実際の絵を元に、具体的に学べたことが良かった」「絵やエピソードを交えた講義で、発達段階を踏まえた造形表現の方法や創造性を学べた」「子どもの心の表現を大切にする点、保育士の関わりについて良く理解できた」、「『探究的な学び』が幼児教育段階の気づきから始まり、小・中学校で深化することを強く学べた」「子どもに『保育者の正解』を求めているかという問いが、保育を振り返る機会となった」が挙げられた。

総じて、子どもの作品を示し、実際の活動に基づいた講演が評価され、造形表現の理解が進み、創造性を育む考え方を学べたとまとめられる。

4.2.3.2 講演②「特別支援の視点からの創造性教育」の共催者満足度、感想（理由）（質問紙 項目⑤⑥）

講義②での共催者満足度では、「非常に満足」50.0%（2名）、「ある程度満足」50.0%（2名）「ない」であった。理由

表 13 共催者アンケート結果

	A	B	C	D
① 回答者 職名	指導主事	指導主事	指導主事	保育士
② 共催者として、期待した内容(自由記述)	日々の保育の振り返りと学びが深められること	最新の保育教育の情報に触れ、日頃の保育教育に活かす	職員のスキルアップ	日々の保育に活かせる知識の獲得
③ 講演①「幼児造形表現を通して創造性教育」の満足度(5段階評価)	1 非常に満足した	1 非常に満足した	1 非常に満足した	1 非常に満足した
④ 問③の理由(自由記述)	子どもの心の表現を大切にすること、保育士の関わりについて良く理解できた	子どもの実際の絵を元に、具体的に学べたことが良かった。「探究的な学び」が幼児教育段階の気づきから始まり、小・中学校で深化することを強く学べた	実例に沿った話で、分かりやすかった	絵やエピソードを交えた講義で、発達段階を踏まえた造形表現の方法や創造性を学べた子どもに「保育者の正解」を求めているかという問いが、保育を振り返る機会となった
⑤ 講演②「特別支援の視点からの創造性教育」への満足度(5段階評価)	1 非常に満足した	2 ある程度、満足した	2 ある程度、満足した	1 非常に満足した
⑥ 問⑤の理由(自由記述)	創造性を育むには初めは間違わせないこと、スモールステップ、たくさんの活動、ほめられる機会を増やす理屈がわかりやすかった	間違ふことで子どもがやる気を失い、苦手意識を高めないう、初めはエラーで学習を進める必要性を学べた時間がもう少し長く取ればより良かった	行動心理学の視点からの支援方法を具体的に学べた	保育で、具体的にどう取り組むかを解説してもらえ良かった講義内容にじっくり聞くには時間が足りなかった、ゆっくり時間をかけ聞きたいと感じた
⑦ 講演全体を通しての満足度(5段階評価)	1 非常に満足した	2 ある程度、満足した	2 ある程度、満足した	2 ある程度満足した
⑧ 問⑦の理由(自由記述)	共通理解が持てた	保育所、幼稚園、児童発達支援センター等の先生方が集まった。講演を受け、グループワークなどで交流できる場面もあれば良かった	子ども理解の視点の重要性を感じ、保育のスキルアップに繋がった	2つの講義には時間が足りないと感じた2回に分けてもよかったのではないかと2時間程度の研修で、参加しやすかった
⑨ 学びは、参加者の業務に役立つか(5段階評価)	1 非常に役に立つ	2 ある程度、役に立つ	2 ある程度、役に立つ	1 非常に役に立つ
⑩ 問⑨の理由(自由記述)	自分の保育を振り返ることができた	この時期は、絵画表現の取り組みを行う幼稚園や保育所が多く、保育者のことばがけで探究的な表現につながる事が分かり、ことばかけの変化が期待できる	参加者のスキルアップに繋がり、保育力の向上にも繋がった	具体的な例をあげてくださったので、日々の保育に取り入れやすい
⑪ 今後、共催したいか(5段階評価)	1 是非、共催したい	2 やや、共催したい	4 あまり、共催したくない	1 是非、共催したい
⑫ 共催したい内容(自由記述)		幼保小連携、滑らかな接続の取り組み 幼児期のインクルーシブ教育		
⑬ 事業の運営面でのご意見(自由記述)	関係者の皆さん、ありがとうございました	大がかりな準備ではなく、コンパクトな準備運営ができる点良かった	年度途中では日時・会場確保が難しい他市町とつながれた	

として、「創造性を育むには初めは間違わせないこと、スモールステップ、たくさんの活動、ほめられる機会を増やす理屈がわかりやすかった」「行動心理学の視点からの支援方法を具体的に学べた」「保育で、具体的にどう取り組むかを解説してもらえ良かった」「(講義)時間がもう少し長く取ればより良かった」が示された。

子どもの学習心理に基づき、学習の手続きを具体的に示したことが評価されていた。終了時間の関係で講演時間が短くなったことが満足度に影響していた。

4.2.3.3 講演全体を通した共催者満足度(質問紙 項目⑦⑧)

講演全体を通した共催者満足度では、「非常に満足」50.0%(2名)、「ある程度満足」50.0%(2名)「ない」であった。理由として、「保育所、幼稚園、児童発達支援センター等の先生方が集まった」「共通理解が持てた」「講演を受け、グループワークなどで交流できる場面もあれば良かった」「子ども理解の視点の重要性を感じ、保育のスキルアップに繋がった」など、普段顔を合わせない方々と共に研修をし、理解を深められたことへの評価が示された。グルー

プワークなどで更に交流、理解を深めることも提案された。講義時間について、「2つの講義には時間が足りない」「2回に分けてもよかった」という意見や、「2時間程度の研修で参加しやすかった」という見方が示された。

4.2.3.4 「研修での学びが参加者の業務に役立つか」、理由(質問紙 項目⑨⑩)

「研修での学びが参加者の業務に役立つか」との問いでは、「非常に役立つ」50.0%(2名)、「ある程度役立つ」50.0%(2名)であった。理由として、「この時期は、絵画表現の取り組みを行う幼稚園や保育所が多く、保育者のことばがけで探究的な表現につながる事が分かり、ことばかけの変化が期待できる」「自分の保育を振り返ることができた」「参加者のスキルアップに繋がり、保育力の向上にも繋がった」「具体的な例をあげてくださったので、日々の保育に取り入れやすい」であった。

4.2.3.5 「今後、同事業があれば共催したいか」「共催したい内容」(質問紙 項目⑪⑫)

次回の事業共催の意向では、「是非、共催したい」50.0%

(2名)、「やや、共催したい」25.0% (1名)、同数で「やや、共催したい」「あまり共催したくない」がそれぞれ25.0% (1名)であった。共催したい内容は、「幼保小連携、滑らかな接続の取り組み」「幼児期のインクルーシブ教育」であった。

4.2.3.6 事業の運営面でのご意見 (自由記述) (質問紙項目⑬)

運営面への意見としては、「大がかりな準備ではなく、コンパクトな準備運営ができる点が良かった」「年度途中では日時・会場確保が難しい」「他市町とつながれた」などが示された。

4.3 その他の結果 講演会終了後の相談行動

講演終了後、16:20 から、各施設や学校の個別の研修・研究の相談にあたる時間を設定した。講演講師の教授、准教授が、各3名(者)、計6名(者)と自園の現状や自園で開催したい研修(会)について、本事業の他市での開催などについての相談に対応した。閉館時間が迫り、十分な時間の確保は難しかったが、大学教員とのつながりがもてる時間となった。

5 考察

5.1 参加者

参加者は、保育士35.4%が一番多く、保育士や保育教諭などの幼児施設関係者が72.9%であった。年代、勤続年数間の差は小さく、幼児施設関係者の多くが関心を持ち、参加したことがわかった。また、保育士に次いで障害児支援に携わる施設職員等が18.8%と多かった。「社会福祉法人ふたば福祉会 児童発達支援センター通園ありんこ」が共催者であったことや「特別支援の観点」からの講演内容が関心を集めたと考えられた。管理職、行政関係者の参加もあり、新たな事業への関心の高さととらえることができた。

反面、小学校以上の教員の参加者が6.3%(1名)となり、教科教育関連のテーマでなかったこと等が影響したと推察した。

5.2 参加者、共催者の参加目的

主テーマである「創造性・主体性」に次いで、「造形表現」

「特別支援」「日々の保育の質向上」に関心が高いことがわかった。また、「新たな学びを得たい」という学びへの意識の高い参加者が多かった。

共催者では、「日頃の保育・教育に活かす」など、参加者のスキルアップを目的に共催にしたことが示された。

5.3 参加者、共催者の満足度

参加者、共催者ともに、「全体を通した満足度」、講義①、講義②の満足度は、「非常に満足」「ある程度満足」を合わせた値が80.2%以上となり、「研修での学びが業務に役立つ」とした参加者が85.4%であった。本事業に対し満足している結果となった。理由として、「5.2 参加者、共催者の参加目的」で示したように、まず、参加者が明確な目的を持ち参加していたこと、さらに講義内容がテーマに沿い明確で具体的であったこと、実例や画像、動画などを交え、講演がわかりやすかったことが、高い満足度につながったと考察できた。

反面、「時間が足りない」と答えた割合が、講演①で21.5%、講演②では22.7%となり、「4.1.3.8 運営面での要望やアドバイス (自由記述)」でも「③各講義が1時間ではもったいない。」との意見も寄せられた。講演内容に対して設定時間が短かったことや終了時間が迫り駆け足的な展開になったことが要因と考えられた。一講義時間60分では、参加者の要望に応えきれていないことが示される一方で、共催者からは、「2時間程度の研修が参加しやすい」等の意見もあった。拘束時間を短くし、参加しやすさを重視したプログラム構成であったが、共催市町との間で、予想される参加者についての情報をさらに共有しプログラムを計画する大切さが示された。講演時間を延ばすことだけでなく、1回にとどまらず継続的に実施する方法や、専門分野を絞ったテーマ設定での実施等も考えられる。

5.3 運営面

参加者からは、今回の「地域へのおでかけ」についての満足感や、さらなる開催への期待が示されていた。共催者からも「是非、共催したい」という意見がある反面、「あまり共催したくない」との意見も示され、理由として「年度途中の企画、開催の難しさ」が示されていた。前年度末に大学側から共催市町に打診は行っていたものの、正式な共催依頼が当該年度となり、大学側と共催市町の日程調整や

100 人規模の駐車場を有する会場の選定、調整に労力を要したことなどが要因と考えられた。年度をまたぐ企画の難しさはあるが、前年度からの調整の重要性が再確認できた。

講演内容の企画は大学が行い、会場運営は共催市町と役割を明確にしたことで、打ち合わせ内容が絞れ、打ち合わせにかかる時間的なコストも削減できた。また、互いへの依頼文の作成等の事務的な作業も省くことができた。講師への謝礼金や会場使用料等、共催市町の金銭的な負担はなく、コンパクトな運営ができたことは大変意義深かった。

5.4 総合考察

「研究機関が遠い地域」への大学が果たす研修・研究支援のあり方について、「おでかけ！和歌山信愛大学」の事業を通し、その方法について検証を行った。

大学が、講演内容を企画し、会場運営を共催市町が行うことで、事務的に効率よくコンパクトに、大学が地域における研修事業を実施できた。共催市町が参加者募集を担ったことで、研修テーマに関心の高い参加者を募集できたことなども、参加者の満足度につながった。

参加者や共催市町の満足度、また講演会終了後、大学教員と自園の研修について相談する参加者の姿からも、この事業が、地域の先生方や、開催市町の担当者と大学（教員）がつながるきっかけとなり得たのではないかと考える。和歌山県には「研究機関が遠い地域」が多くある。今回のような事業を積み上げていくことで、地域における地元大学が、地域とのつながりが深め、研修・研究ニーズを掘り起こし、地域を支える地域連携・地域貢献の形を構築できるのではないかと考える。

態についてのアンケート調査結果」

https://warp.da.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/286893/www.toshisaisei.go.jp/03project/dai10/File7_renkei2.pdf（最終アクセス 2025.01.10）

文部科学省（2006） 「教育基本法」

https://www.mext.go.jp/b_menu/kihon/about/mext_00003.html（最終アクセス 2025.01.10）

和歌山信愛大学（2023） 「わかやま子ども学総合研究センター規程」『わかやま子ども学総合研究センター規程集』

<https://www.wsu.ac.jp/research/general/>（最終アクセス 2025.01.10）

引用文献

大藪俊志（2022） 「大学における地域連携活動：現状と方向性」 『佛教大学総合研究所紀要』 第 29 巻 pp. 39-52

野澤一博（2016） 「大学の地域連携の活動領域と課題」 『産学連携学』 第 13 巻 pp. 1-8

深沼光（2010） 「大学と地位域の連携—継続の効果と課題—」 『日本政策金融公庫論集』 第 7 号 pp. 21-47

内閣官房都市再生本部（2007） 「大学と地域との取組実